



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

幼児の感情制御の発達不全評価尺度の作成（1）： 2歳児における質的データの分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大河原,美以, 鈴木,廣子, 藤岡,育恵, 殿川,佳子, 響,江吏子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108093

幼児の感情制御の発達不全評価尺度の作成 (1)

—— 2歳児における質的データの分析 ——

大河原 美以*・鈴木 廣子**・藤岡 育恵***・殿川 佳子***・響 江吏子*

教育心理学

(2010年9月27日受理)

1. 本論の目的

筆者は、これまでの臨床経験を通して、きれいな子どもやおちつきのない子どもの増加、いじめをする子どもの問題、一部の不登校や心身症や学級崩壊などの問題の根底には、感情制御の発達不全の問題があることを指摘し、感情制御の発達不全の症状形成の仮説モデルを提示してきた⁷⁾。大河原⁷⁾の仮説モデルにおいては、親が子どものネガティブ感情を否定するコミュニケーション不全が子どもの感情の発達に重大な影響を及ぼすことを重視している。特に、乳幼児期におけるコミュニケーション不全は、愛着システム不全を引き起こし、感情制御にまつわる脳機能の発達に直接的な影響を及ぼす可能性があると考えられる(本論集; 別稿⁸⁾)。子どもの健全な発達を保障し、将来の心理的問題を予防していくためには、乳幼児期の段階での支援がきわめて重要である。

臨床経験の中から得られた仮説の妥当性を示すためには、実証的なエビデンスを示す必要がある。本研究は、大河原⁷⁾⁸⁾に示した感情制御の発達不全の症状形成の仮説モデルの妥当性を検証するための予備研究にあたる。実証研究のためには、仮説にもとづいた幼児の感情制御の発達不全を評価する尺度が必要である。そこで筆者らは、幼児の感情制御の発達不全評価尺度を作成するため、2歳児の感情制御の実態把握を目的として保育士を対象に自由記述による予備調査を行なった。

本論の目的は、自由記述による予備調査結果を質的に分析し、2歳児の感情制御の発達不全の実態を把握

したうえで、幼児の感情制御の発達不全評価尺度の項目を選定することである。

2. 調査方法

2. 1 調査協力者

調査協力者は、保育士151名。調査は、東京都(12園)・千葉県(15園)・岩手県(6園)の保育園の協力を得て実施し、2歳児を担当している保育士に回答を求めた。うちわけは、東京都53名(回収率44%)・千葉県56名(37%)・岩手県42名(回収率69%)であった。

2. 2 調査内容

「2歳児の発達状態についての調査」として、「2歳児の『気になる』『なんかおかしい』『理解できない』行動」について、「どんな場面でどんなふうに『気になる』のか」について、自由に記述することを求め

表1 逸脱した感情表出の記載数

逸脱した感情表出の枠組み	記述数	%
過覚醒反応と解離反応の両面を示している姿	20	16.7
解離反応が顕著な姿	13	10.8
過覚醒反応が顕著な姿	45	37.5
反応性愛着障害の典型的症状	脱抑制型	4 3.3
	抑制型	8 6.7
発達障害の疑いに関する記述	24	20
その他	6	5
計	120	100

* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)
** すずきひろこ心理療法研究室
*** 東京学芸大学大学院教育学研究科

た。また、参考として、「小学校に入学後問題が表出した児童の保育園時代をふりかえって気づくこと」及び「最近の子どもの感情表出や行動について気になること」の記述を求めた。

2. 3 調査時期

平成21年12月～平成22年2月

3. 質的分析

質問紙の回答のうち、質的分析には「2歳児の気になる行動」に対する回答のみを使用した。

保育士による自由記述を詳細に検討していくと、そこには子どもの個の問題と、子どもと保育士との関係性の問題が区別されることなく、記述されていることがわかった。そこで、以下に個の問題と関係性の問題をわけて、それぞれに焦点をあてて、質的分析を行った。

3. 1 2歳児の逸脱した感情表出(個の問題)

個の発達の問題に焦点をあてて、質的分析を行った。大河原と鈴木の判断により、個の問題ではないと判断される記述(31例)を除き、2歳児の感情表出として、正常発達を逸脱していると思われる記述のみを抽出した。2歳児の逸脱した感情表出の質的分析に使用したデータは120例であった。

これらの記述は、大河原⁷⁾の感情制御の発達不全の症状形成に関する仮説モデルに沿って、表1に示した枠組みに分類することが可能であった。分類にあたっては、大河原(臨床心理士)と鈴木(精神科医)および藤岡・殿川・響の学生3名(3人で協議して検討)が独立して分類したあと、さらに協議により分類を決定した。表2～表5に、それぞれの項目の特徴と典型例を示した。

大河原⁷⁾⁸⁾では、個が抱えるネガティブ感情に対する脆弱性が、乳幼児のストレス反応としての過覚醒(hyper arousal)反応と解離(dissociative)反応として症状化することを示してきた。過覚醒反応は乳幼児の最初のストレス反応であり、解離反応は過覚醒反応に対

表2 過覚醒反応と解離反応の両面を示している姿

	特徴	数	典型例
過覚醒反応と解離反応の両面を示している姿	保育園では自分の思いどおりにならないと、激しい暴力がでる。親の前ではそのようなことはない。	4	2歳児が自己主張するのは発達上当然のことであるが、相手の子への叩き方、泣き方、かじり方の出し方が普通ではなく暴力的である。保育者がなだめようとしたり受け止めても素直になれずいじけてしまう。母の前では聞き分けがよく、おりこうにしておき、そのような行動はでない。
	保育園では大人の指示に従おうとしない。親のいうことはよくきく。	2	保育園では全てのことをイヤといい、大人の指示と反対のことをする。保護者に保育園での様子を話すと、家ではとてもいい姉で弟にやさしく、母親が姉を頼りにしていて、家ではダダをこねることはないということであった。
	保育園では「ダメ」など注意をうける場面で、怒りだしパニックになる。親の前ではそのようなことはない。	1	「ダメだよ」「いけない」等の言葉や強い口調で注意されると、そのことに対して激しい怒りを表し、保育士に対しても「先生が悪い」と泣いたり、保育士をたたいたりパニックになってしまう。どうしていけないのかについて話そうとしても聞かれないことができず、落ちつくまでに相当な時間がかかる。家庭ではそうした様子は、まったくないということであった。
	保育園では担任に甘えて激しく泣く。親の前ではそのようなことはない。	2	家ではとても良い子で、母が子を頼っているように見える。保育園では担当に甘え、とにかく激しく泣き、こちらを振り向かせようとする。
	保育園では自分の思いどおりにならないと、年齢相応にがまんすることができない。親の前ではそのようなことはない。	2	保育園では、みんなが同じものをほしがった時、「順番こね」や「かしてー」と大人が仲立ちをすることで、待つということを学習していくが、大人の援助があっても、まったく少しも待たず、自分のものにしようとして、がまんできない。保護者からの連絡ノートには、いつも下の子にゆずってくれるいい兄であると書いてある。
	保育園ではおちついているが、親の前ではやってはいけないことをする。	2	保育園では、やってはいけないことのルールがわかり、ふつうに生活できているのに、保護者が一緒になると、登ってはいけないところに登ったり、靴を投げたりする。親も注意することができていないようだ。
	保育園ではおちついているが、親の前では豹変して暴力的になる。	2	保育園では、ふつうに生活を送っているが、母親が迎えにきたとたん態度が豹変し、母に対して、威張った態度になり、大声でどなったり、理由をつけて遊びまわり、母を困らせている。園ではおりこうにしている、家では甘えるというの一般的なだが、あまりにもギャップが大きすぎ、親に対して暴力的になっている。
	特定の保育士がいるときと、いないときとで様子が異なる。特定の保育士がいないと、暴力がでる。	1	担当の保育士が休みの時、いないと分かった時点から、机の上に乗るなどふだんはしないことをして、他の保育士の気を引く行為をとる。注意されると、保育士をたたきはじめる。担当の保育士がいるときには、そのようなことはなく、おちついている。
	激しく泣いてパニックになっていたかと思うと、急にけろっとして、また同じことをするなど、気分が連続性がない。	4	他の子に対して危ない事をして、保育士に注意されると、何も話が聞けないくらいに大泣きするが、すぐにケロっとして同じことをする。だんだんと話が通じてくる時期だが、ちゃんと言っている事がわかっているのか気になる。
計	20		

表3 解離反応が顕著な姿

	特徴	数	典型例
解離反応が顕著な姿	親の前で無表情になる。	2	迎えに来るまでは楽しそうに笑ったり話をしたりしていたのに母親が迎えにきたとたん、人が変わったように無表情になり口をきかなくなる。
	無表情でぼーっとしていることがたびたびある。	1	保育士も心配してなるべく濃く関わろうとするのだが、ふとした時に無表情でぼーっとした顔つきをみせる。
	注意されたり、叱られたりしたときに目を合わせられない。	1	友だちが使っているものを取ったり、たたいたりした時に、保育者がいけないということを伝えようと、目をそらして視線を合わせようとしない。
	注意されたり、叱られたりしたときに、にらむ。	1	自分がいけないことをしているのに、言われたことに対して、無言でにらんだり、あっかんべえ(すごく嫌な気持ちにさせる表情)で応える。
	注意されたり、叱られたりしたときに無表情になる。	1	お友達をたたいたり、いけないことをして保育士に1対1で注意されると、絶対に目を合わさず、無表情でぼーっとした状態で聞いている。
	親の期待に応えようとして、本心ではない行動をしているようにみえる。	2	母親が産休中で下の子と家にいるので、母親は「お休みをして家にいようと言っても、この子が保育園好きだから行くと言うんです」ということで、登園するが、母親とバイバイしたあとで、泣き始める。ほんとは母親と一緒に家にいたいのに、母親の期待に応えようとして、保育園に行きたいと聞いている。
	「いじめられた」などの被害を訴えることで、親の関心をひこうとすることがある。	1	母親に「・・・にいじめられた。」「・・・が仲間に入れてくれなかった。」と実際になかった事があった事のように伝える。被害者であるということで、母に受け入れてもらえるということを学習しているように見える。
	けんかをしたときに、怒っている友達の感情を理解できない様子がある。	1	ふつう(他の子の場合)は、どうして友だちが泣いているのかや怒っているのかを尋ねると答えることができ、「じゃあ何で言えばいいかな?」など尋ねると謝ることができる場合が多いのだが、なんとなく「ごめんね」と言うものの、なぜ友だちが泣いたり怒ったりしているか理解できない様子。そういう質問をいくつか続けると表情が固くなっていき、他の話や簡単な質問をしても無表情で何も答えられなくなってしまうことがある。
	泣いて訴えるべき場面で、すぐにあきらめてけろっとする。	1	自分が大事にしていたおもちゃを取られた場面などでは、泣いて大人に助けを求めるものだが、くやしい気持ちに持ちこたえられず、すぐにあきらめて他の遊びをはじめ、自分の気持ちを出せない。
	動物などになりきることで、現実逃避しているような姿がみられる。	2	話の内容が突然全く別の話になり、自分のことを動物だと言いだして猫になりきる。
計	13		

する適切な対応がなされないときに転じるトラウマ反応である^{1) 2) 10)}。Perry, B.D. & Pollard, R.⁹⁾ は、乳幼児期のトラウマ反応として、過覚醒反応と解離反応(過覚醒の対極にあるものとしての解離)が神経生理学的な一連のカスケード反応として生じることを示した。本研究では、大河原^{7) 8)}の臨床仮説にもとづき、自由記述により得られた2歳児の感情制御の発達状況を分析するにあたって、過覚醒反応と解離反応に関する記述を中心に分類を試みた。その結果、表1に示したように、過覚醒反応と解離反応の両面を示している姿、解離反応が顕著な姿、過覚醒反応が顕著な姿を示した記述に分類することができた。そのほか、DSM-IVの診断基準である反応性愛着障害の典型症状についての記述、発達障害の症状の疑いと思われる記述があった。

①過覚醒反応と解離反応の両面を示している姿

表2に示したように、過覚醒反応と解離反応の両面を示している姿においては、保育園の姿と親の前の姿が著しく異なることが特徴的である。保育園では、暴力的になり、指示に従えず、注意されるとパニックになり、甘えが激しく、がまんすることができない姿を示しているが、親の前ではきわめてよい子でそのような行動を示さない。また、反対に、保育園ではおちつ

いているが、親の前で言うことをきかない姿や、豹変して暴力的になる姿も示されていた。また、特定の保育士と他の保育士とで異なる反応を示す、過覚醒がすぐに解離に転じる(パニックからすぐにケロっとする)姿についての記述もあった。

②解離反応が顕著な姿

表3に示したように、解離反応が顕著な姿においては、無表情になることが特徴的である。注意されたり叱られたりする場面で、目を合わせられない、にらむ、無表情になるなどの反応が記述されていた。また、2歳児であっても、親の期待に応えようとして無理をしている姿や、いじめられたという訴えをすることで親の関心をひこうとする姿がみられ、身体反応を解離させて認知的な処理で適応をはかろうとする姿がみてとれる。自身の感情を解離させているため、友達が怒っていることを理解できない様子や、くやしい気持ちをすぐにはいかにしてあきらめが早い姿なども記述されていた。動物になりきる姿は、幼児によくある正常解離の姿であるが、それが防衛として頻繁に使われる場合には、解離傾向を強めていくと思われる。

表4 過覚醒反応が顕著な姿

	特徴	数	典型例
過覚醒反応が顕著な姿	おちつきのない時間帯に、興奮状態がなかなかおさまらない。	6	周囲が騒がしくバタバタした雰囲気するとき、「キヤー」と奇声をあげたり、テーブルの上に乗ったりする。又「うるせー」「バカヤロー」などと汚い言葉を言ったりもする。
	午睡などの静かな時間帯になると、なかなか興奮状態がおさまらない。	4	午睡時間になると興奮してしまう。布団の中でジャンプしたり、上を走り回ったり、大きな声を出す様子。ふつうは保育士がそばについて声をかけたり、優しく背中をトントンすると、眠る雰囲気になるが、様子はかわらずで、寝つくまで時間がかかっている。
	日常的に「死ね」「ぶっ殺す」などの暴言をはく。	1	「死んだ」「ぶったおす」という言葉を使ったり、「キヤー」といった奇声が多い。テレビなどから影響を受けていると思うが、日常的にきいて自然と覚えてしまっている。
	思いどおりにならないと、おしゃぶりを求める。	1	あそんでいる時、自分の都合が悪くなった時、保育士がどうして泣いているのか聞いてあげると、ふつうは泣きながらも自分のことを訴えるのに、泣いて泣いておしゃぶりをさがしおしゃぶりでないとおさまることができない。
	思いどおりにならないと、「死ね」「ぶっ殺す」などの暴言をはく。	3	遊んでいる場面で自分の思い通りにならなかったりした時、相手(大人の場合もある)に対し、「刺してやる」「殺してやる」「火をつけてやる」など暴言をはきながら、ままごとのフォークや長いシャベルなどで実際に刺そうとする。
	思い通りにならないと、叩いたりかみついたりする。	3	遊んでいる時、お友だちにおもちゃをとられたり、ぶつかられてしまった時、ふつうは保育士が間に入り話をすると、怒っていても納得したり、悲しくなって泣きついてくるなどの反応がみられるが、自分が相手を攻撃しないと気がすまず、いつまでもその思いを抱えている。話をしようとしても全く耳に入らない様子。
	思いどおりにならないと、とびだしていく。	2	ほしいおもちゃを貸してもらえなかったときや、好きなお友達と手をつなげなかったときなど、自分の思い通りにならないと「イヤだ〜」と言って保育室をとび出していく。
	思い通りにならないと、泣き叫んでパニック状態になる。	7	2歳児は「自分で」「自分のもの」といった主張が激しい時期だが、相手の気持ちやその子の気持ちを受容していても一向におさまらない。自分の思いが通じるまで泣きやむことが出来ず、パニック状態になってしまう。
	思い通りにならないと自傷行為をする。	1	自分の思い通りにならなかった時、怒って泣くだけでなく、後ろにひっくり返って頭を床に打ちつけるなどの自傷がみられる。
	「自分の物」と思っているものにさわられたり、とられそうになると攻撃的になる。	3	遊びの場面で、自分の近くに気に入ったおもちゃを「自分のもの」として集め、ごっこあそびの中で、誰かがうっかり「その子のもの」に手を出すと、激しく怒り、ひっかいたりかみついたり攻撃的になる。
	葛藤場面で、スイッチがはいたように、奇声をあげて怒り出す。	1	友達とのトラブルの場面などで、急にスイッチがはいたように奇声をあげて怒り出す。いやなことがあったら、怒るのは当然だが、いままでご機嫌にしていたのに、急に豹変する様子がふつうのレベルとは異なる。
	葛藤場面で、攻撃した理由を、相手のせいにする。	2	攻撃的な行動を注意をすると、相手がいけなかったのだということを必死に主張し、正当化しようとする。
	葛藤場面とは、関係のない子をたたいたり、かじったりする。	3	けんかをしたときに、一度仲直りしたようにみえても、しばらくたってから関係のない子を叩いたり、他児のけんかをみて自分は関係ないのに、悪いと思った子を叩きにいたりする。
	攻撃的な遊びが過剰にエスカレートする。	1	あそびの中で鉄砲や剣を作ると、相手の顔の目の前でバンバンと撃つ真似をしてあそび、激しくエスカレートして、相手が嫌がっていても気にせず笑いながら続けてしまう。
	いじわるをする。	2	お友達に対して「一緒に遊んであげないよ」「○○ちゃんなんてキライ」など、いじわるな発言をする。
	眠くなると、乳児のように泣いて訴える。	1	ねむたくなると、乳児のように、ただただ泣いて泣いて訴える。
	泣き始めると泣き止むタイミングをみつけられない。	1	初めはうまくいかなかったことに対して泣いたり、怒ったりしているのだが、保育士が思いを受け止めスキンシップをとっても、そのうち泣いていることがメインになり、何で泣いているのか本人もおさまりがつかなくなり、泣き止むタイミングがみつけられなくなってしまう。
	遊具をばらまき、遊びが成立しない。	1	手当たり次第に遊具をばらまき、遊びが成立せず、他児の遊びも壊してしまう。
	常に感情が不安定で起伏が激しい。	1	すぐ泣きだし、感情が不安定で起伏が激しい。
	不安な場面で、走りまわるなど多動になる。	1	なかなか仲間に入れない場面で、保育士が仲介すると一緒にあそびたいと気持ちを伝えたり、自ら思いを言葉にしてあらわすが、いざ仲間に入ると、すぐその場を離れて歩き回る。走り回る。
計		45	

表5 反応性愛着障害を示している姿

	特徴	数	典型例	
反応性愛着障害	脱抑制型	2	実習生や新しい人(大人)が来ると、用心深くしながら興味をもって接する子が多い中、登園してはじめて会う人にとびついていたり、必要以上に抱きついて相手の様子(いやがっている姿)もわからずへばりついている。離すと泣いてパニックになってしまう。	
		2	大人にかまってもらいたくて、午睡時に、大人が添い寝をしてトントンしていても、どんどん要求が高くなって、「抱っこ→立って抱っこ」とグズグズして、泣きながら眠ることも多い。	
	抑制型	2	午睡時、他児はトントンされ安心して入眠するが、トントンされることを嫌がり、一人で横になり入眠する。あそびについても他児や保育士とかかわってあそぶということがほとんどなく、一人あそびで満足していることが多い。	
		1	親がお迎えに来て嬉しそうに顔をしない。帰りの支度は全部自分でやり、母の姿が見えるとトイレにも自分から行って、室内に来たらすぐに帰れるようにする。	
		1	何事に対しても意欲が見られず、着替えなど手を差し伸べてもやる気がない。手伝おうとしても全身の力を抜いて手伝うことができない。保育士に手伝ってもらっても「やるう」と本児が思えるようになるまで手伝うことができない。	
		2	遊びに入っていく(集中する)力が弱く、不安になると口に手を突っ込みよだれまみれになっている。もう片方の手は担当保育士の耳を安定剤の様につかんで離すことができない。	
		2	泣き始めると、保育士の気持ちをくむ言葉がけにも落ちつかず、しばらく泣きやめない。着替えも集中できず、なかなか身につかず、性器いじりが頻発している。	
		計	12	

③過覚醒反応が顕著な姿

表4に示したように、過覚醒反応が顕著な子は、興奮状態がおさまらず、暴言やパニック、暴力が特徴的である。思いどおりにならないときの反応として、おしゃぶりを求めたり、飛び出したり、自傷行為をすることで、自身のネガティブ感情をおさめようとしている姿が記述されていた。また、葛藤場面でのネガティブ感情を処理できないために、関係ない子に暴力をふるったり、相手のせいにしたりするなどの反応も記載されていた。暴言は、「死ぬ」「殺す」「刺してやる」といった2歳とは思えないような言葉が記述され、小学生の暴言とかわらないものであった。

④反応性愛着障害の典型的症状

DSM-IV-TR¹²⁾では、「幼児期または小児期早期の反応性愛着障害」の診断的特徴として、抑制型は「ほとんどの対人的相互反応を発達の適切であるやり方で開始したり反応したりできない。子どもは過度に抑制され、過度に警戒的でまたはきわめて両価的な反応様式を示す」としている。脱抑制型は「無分別な社交性や、愛着を持つ人物を選ぶ選択力の欠如を示す」としている。この診断基準にあてはまると思われる行動の記述を、表5に示した。

⑤発達障害の疑いに関する記述

保育士が「気になる行動」としてあげた記述のうち、知的障害に関するもの、自閉傾向に関するものは、「発達障害の疑い」に分類した。

⑥その他

その他に分類された「気になる行動」は、排泄と偏食に関するものであった。鈴木ら¹¹⁾の調査にあるよ

うに、排泄と食事についての発達の遅れはきわめて重要な課題であるといえる。記述数が少なかったので、本論ではその他に分類した。

3.2 保育園における問題増幅の構造(関係性の問題)

保育士と2歳児との相互作用(関係性)における問題に焦点をあてて、質的に分析した。

保育士に記述してもらった「2歳児の気になる行動」のうち、保育士の関わりにより問題が増幅していると思われる記述、また、2歳児の感情表出に対し保育士が何らかの関わりを行なっているが、その表出がおさまらないという記述を分析の対象とした。質的分析に使用したデータは67例であった。

2歳児が保育士との関わりの中でネガティブ感情を表出する過程について時系列に沿って分析した(図1)。まず、2歳児がネガティブ感情を抱いていない(と思われる)「ネガティブ感情非喚起場面」と、2歳児がネガティブ感情を抱いている(と思われる)「ネガティブ感情喚起場面」の2つに分類した。

「ネガティブ感情非喚起場面」は、幼児自身のこだわりや興味関心により周囲の子どもたちや保育園の流れに乗ることができない状態などが含まれる。幼児自身は自分のペースで行動しているだけなので、ネガティブ感情は喚起されていないと思われるが、保育園という集団に関わる保育士にとっては、気になる行動となる。そこで保育士は、このような幼児の行動に対して「中止、注意、説明」することで制御をかける。そうすると、幼児にはネガティブ感情が喚起され、泣いたり怒ったりかんしゃくを起こしたりすることに

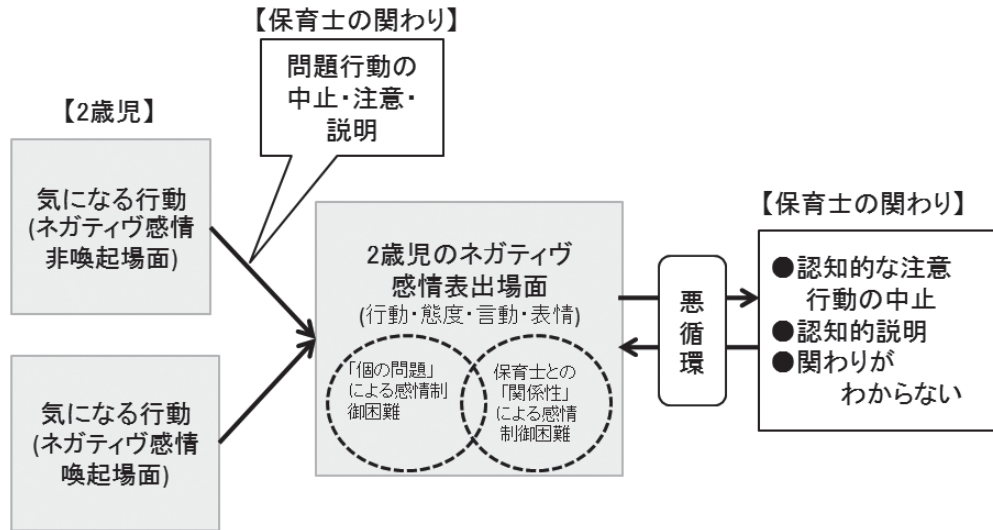


図1 保育園における問題増幅の構造

なる。

「ネガティブ感情喚起場面」は、幼児同士が物の取り合いをしたり、作っていたものを壊されたり、ケンカをしたりする場面である。このような場面では、2歳児自身にネガティブ感情が喚起される。

どちらの場合も、表出されたネガティブ感情に対して、保育士が感情をおさめさせるための関わりを行なうが、その関わりに幼児がスムーズに反応しておさまっていかない時に、保育士に「気になる行動」と認識されるものと思われる。

保育士が2歳児のネガティブ感情をおさめる方法としては、7通りの関わり方があったことが分かった(表6)。「①気持ちをくむ声かけ」は保育士が幼児のネガティブ感情を受容する関わりで、具体例として、「気持ちをくむ声かけをした」「想いを聞いた」などが含まれた。「②認知的注意・行動の中止」は、幼児の危険な行動や叩き合いなどに対し、その行動を止めると共に、注意をしたり叱ったりする関わりである。具体例として保育士の記述に「注意すると」「厳しく叱

ると」と記述されたものや、「ダメだよ」「いけません」と書かれていたものが含まれた。「③認知的説明」は、ルールや決まりに関して保育士が認知的に説明すること、また、相手の感情について考えさせてやってはいけないことを説明する関わりである。具体例として『「静かに眠ること」を何度伝えても」という記述や、「保育士が仲立ちして友だちの嫌な思いを伝えるが」という記述が含まれた。「④理由をたずねる関わり」は、2歳児がいけないことをした際に、なぜそのようなことをしたのか、気持ちや理由について尋ねる関わりで、「理由を聞くと」「どうして〇〇したの?」という記述が含まれた。「⑤肯定的な感情を促す関わり」は、幼児が不安などのネガティブ感情を抱いていると思われる場面で、そのネガティブ感情に触れるのではなく、ポジティブな感情を喚起させるような声かけをする関わりである。具体例として「不安が強く、大人の後を離れない(2歳児に対して)友達や遊びに気が行くように促す」が含まれた。「⑥幼児の言動に反応した関わり」は、幼児の言葉や態度に保育士が反応し、認知的・言語的なやりとりを行なったり、幼児の物理的欲求を満たしたりする関わりである。具体例として「一度パニックになると本当の思いと反対のことしか言えず、保育士が本児の言った通りにするとさらにパニックになる」や、「友だちがブロックや積木で遊んでいると中に入ってきて蹴飛ばして壊してしまう。同じブロックを与えても遊びは集中せず」などが含まれた。「⑦その他」は、「どのような声かけをしてもおさまらない」や、幼児がなぜそのような行動をとるのか理解できず対応に困っているというものが含まれた。

表6 2歳児の感情表出に対する保育士の関わり

	保育士の関わり	記述数	%
①	気持ちをくむ声かけ	5	6.4
②	認知的注意・行動の中止	28	35.9
③	認知的説明	21	26.9
④	理由をたずねる関わり	4	5.1
⑤	肯定的な感情を促す関わり	1	1.3
⑥	幼児の言動に反応した関わり	7	9
⑦	その他	12	15.4
	計	78	100

(1例につき複数回答あり)

表6に示したとおり、「②認知的注意・行動の中止」

と「③認知的説明」が全体の62.8%を占めていた。問題増幅の関わりの中でも、特に認知的な説得による制御が2歳児対象であっても主流となっていることが、明らかになった。

4. 考察

4. 1 2歳児の逸脱した感情表出について

保育士による「気になる行動」についての記述のうち、個の問題に関して、質的分析を行なった結果、大河原^{7) 8)}の臨床仮説を裏付ける実態が把握された。小学校では、学校できれて暴れている子どもが、親の前では問題のないよい子の姿を示していること、そのために学校と家庭との連携が困難になっているという現実がある⁶⁾。本調査の結果、すでに2歳の段階で、同じことが起こっていることがわかった。解離反応と過覚醒反応においても、そこに示された問題行動の姿は、小学校で起こっている問題となんらかわりはなかった。大河原⁷⁾の感情制御の発達不全の症状形成の仮説モデルに示したように、2歳児で生じている反応が、その後の関わりの中で悪循環になり、小学校にあがるときにはすでに悪循環が固定した形になっていることが推測される。よって、予防のためには、幼少期において、親子支援を行なうことが何より重要になってくる。

4. 2 保育園における問題増幅の構造について

保育士による自由記述を質的に分析することを通して、小学校で起こっている問題増幅の構造^{3) 4) 5)}と同じことが、保育園(2歳児)でも起こっていることが明らかになった。筆者はこれまで、ネガティブ感情の制御ができない状態に陥っている子どもには、抱きしめることで安心を与えることが重要であること、ネガティブ感情と同時に安心感を喚起させることで、ボトムアップ制御の体験をさせることが、感情制御の脳機能を育てるために重要であることを論じてきた^{7) 8)}。そして、自身の身体の中に流れているエネルギーとしての感情を大人が言語化してくれる体験を通して、感情の社会化をうながすことが、感情制御できる子どもに育つために重要であることを述べてきた⁶⁾。

2歳児という幼い子どもを対象としている保育士であっても、通常の間わりでおさまりきらない激しいネガティブ感情表出に遭遇すると、認知的な関わりにより、制御しようとする傾向があることがわかった。大河原^{7) 8)}で感情制御の機能を述べたが、過覚醒反応でパニックになっている2歳児に対して、前頭前野に

よるトップダウンの制御を求めても、過覚醒を強めることにしかない。愛着システム不全により健全なボトムアップ制御の力が育っていない幼児が、保育園でネガティブ感情を制御できずにかんしゃくをおこしているときこそ、保育士が適切に関わることが求められる。そのためには、保育士に対する教育、啓蒙が必要である。

5. 尺度項目の作成 (表7)

本論の目的は、自由記述による予備調査結果を質的に分析し、2歳児の感情制御の発達不全の実態を把握したうえで、幼児の感情制御の発達不全評価尺度の項目を選定することである。そこで、上述してきた予備調査を質的に分析した結果、表2-表5に示した2歳児の「気になる行動」の分類を用いて、感情制御の発達不全評価尺度の項目を作成する。

ここで作成する感情制御の発達不全評価尺度は、母がわが子についてチェックする形式で調査することを想定した質問紙である。そこで、表2-表5の各分類の特徴のうち、保育園での出来事のみに関するものを除き、母がわが子の様子をみて答えることができる形に文言を整えた。ここで選定された尺度項目を、表7に示した。

今後、感情制御の発達不全評価尺度を作成するために、次の2段階の調査を経て、内容妥当性と因子妥当性を確認する。まず、この尺度項目の内容妥当性を検討するために、この項目が、2歳児の発達段階としてどの程度の逸脱を示すのかについて、保育士に回答を求める調査を行ない、項目を精選する。次に2-3歳児の母を対象とした調査を行ない、統計処理により、因子妥当性と信頼性の検証を行なう。質的分析の結果、保育園での姿と親の前の姿が異なる過覚醒反応と解離反応の両面を示す姿が、感情制御の発達不全を示す姿として特徴的に示されたが、2歳~3歳の段階では、母がそれを認識することは困難であるため、質問項目に含めることがよいのかどうかは再検討する必要がある。これらの項目は、それぞれ解離反応と過覚醒反応の因子に含まれる可能性もあり、因子分析等の統計処理の中で検討し、妥当性・信頼性のある尺度作成を行なっていく予定である。

付記：調査にご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

表7 感情制御の発達不全評価尺度の質問項目案

過覚醒 反応と 解離反応	1	保育園や親の見えていないところでは、自分の思いどおりにならないと、激しい暴力がでる。親の前ではそのようなことはない。
	2	保育園や親の見えていないところでは、大人の指示に従おうとしない。親のいうことはよくきく。
	3	保育園や親の見えていないところでは、「ダメ」など注意をうける場面で、怒りだしパニックになる。親の前ではそのようなことはない。
	4	保育園や親の見えていないところでは、保育士などに甘えて激しく泣く。親の前ではそのようなことはない。
	5	保育園や親の見えていないところでは、自分の思いどおりにならないと、年齢相応にがまんすることができない。親の前ではそのようなことはない。
	6	保育園や親の見えていないところでは、おちついているが、親の前ではやってはいけないことをする。
	7	保育園や親の見えていないところでは、おちついているが、親の前では豹変して暴力的になる。
	8	激しく泣いてパニックになっていたかと思うと、急にけろっとして、また同じことをするなど、気分に変調がないことがある。
解離反応	9	親の前で無表情になる。
	10	無表情でぼーっとしていることがたびたびある。
	11	注意されたり、叱られたりしたときに、目が泳いで目を合わせることができない。
	12	注意されたり、叱られたりしたときに、にらむことがある。
	13	注意されたり、叱られたりしたときに、無表情になる。
	14	親の期待に応えようとして、本心ではない行動をしているようにみえる。
	15	「いじめられた」などの被害を訴えることで、親の関心をひこうとすることがある。
	16	けんかをしたときに、怒っている友達の感情を理解できない様子がある。
	17	泣いて訴えるべき場面で、すぐにあきらめてけろっとする。
	18	動物などになりきることで、現実逃避しているような姿がみられる。
過覚醒反応	19	おちつきのない時間帯に、興奮状態がなかなかおさまらない。
	20	おひるねなどの静かな時間帯になると、なかなか興奮状態がおさまらない。
	21	日常的に「死ね」「ぶっ殺す」などの暴言をはく。
	22	思いどおりにならないと、おしゃぶりを求める。
	23	思いどおりにならないと、「死ね」「ぶっ殺す」などの暴言をはく。
	24	思いどおりにならないと、叩いたりかみついたりする。
	25	思いどおりにならないと、とびだしていく。
	26	思いどおりにならないと、泣き叫んでパニック状態になる。
	27	思いどおりにならないと、自傷行為をする。
	28	「自分の物」と思っているものにさわられたり、とられそうになると攻撃的になる。
	29	突然スイッチがはいったように、奇声をあげる。
	30	けんかやめごとがあったとき、たたいたりかじったりした理由を、相手のせいにする。
	31	けんかやめごととは、まったく関係のない子をたたいたり、かじったりする。
	32	攻撃的な遊びが、過剰にエスカレートすることがある。
	33	いじわるをする。
	34	眠くなると、乳児のように泣いて訴える。
	35	泣き始めると泣き止むタイミングをみつけられない。
	36	遊具をばらまき、遊びが成立しない。
	37	常に感情が不安定で起伏が激しい。
	38	走りまわるなど多動になる。
反応性愛着障害	39	実習生やはじめて会う大人に対して、初対面のためらいなく、必要以上にスキンシップを求める。
	40	他人の大人に抱きつき、甘えがエスカレートして止まらなくなる。
	41	スキンシップをいやがる。
	42	親に甘えようとするしない。
	43	何事にも意欲がない。
	44	あそびを楽しむことができず、不安が非常につよい。
	45	性器いじりがみられる。

引用文献

- 1) 紀平省悟: 子どもの単回性外傷を再考する, *トラウマティックストレス*, 3, 163-171, 2005.
- 2) 紀平省悟: *トラウマと脱愛着—発達神経学的視点からみた乳幼児の解離—*, *トラウマティックストレス*, 5, 15-23, 2007.
- 3) 大河原美以: 小学校における「きれる子」への理解と援助—教師のための心理教育という観点から—, *東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要*, 第26集, 141-151, 2002.
- 4) 大河原美以: 小学校における「きれる子」への理解と援助(2)—22例の分析からみた「問題のなりたち」—, *東京学芸大学紀要 第1部門教育科学*, 第54集, 103-110, 2003.
- 5) 大河原美以: 小学校における「きれる子」への理解と援助(3)—解離状態の子どもへの治療援助技法—, *東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要*, 第27集, 11-25, 2003.
- 6) 大河原美以: *怒りをコントロールできない子の理解と援助: 教師と親の関わり*, 金子書房, 2004.
- 7) 大河原美以: *教育臨床の課題と脳科学研究の接点(1)—「感情制御の発達不全」の治療援助モデルの妥当性—*, *東京学芸大学紀要総合教育科学系 I*, 第61集, 121-135, 2010.
- 8) 大河原美以: *教育臨床の課題と脳科学研究の設定(2)—感情制御の発達と母子の愛着システム不全—*, *東京学芸大学紀要総合教育科学系 I*, 第62集, 印刷中, 2011.
- 9) Perry, B. D. & Pollard, R.: Homeostasis, stress, trauma, and adaptation; A neurodevelopmental view of childhood trauma, *Child and Adolescent Psychiatric Clinics of North America*, 7 (1), 33-51, 1998.
- 10) Schore, A. N.: *Affect regulation and disorders of the self*, W. W. Norton & Company, New York, 2003.
- 11) 鈴木廣子・大河原美以・殿川佳子・藤岡育恵・響江吏子: 母子の愛着システム不全評価尺度の作成(1)—2歳児における質的データの分析—, *東京学芸大学紀要総合教育科学系 I*, 第62集, 印刷中, 2011.
- 12) 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸訳: *DSM-IV - TR 精神疾患の診断・統計マニュアル*, 医学書院, 2002.